



### 開発者としてのあゆみ

斎藤之良社長は前職での技術者仲間3人と1988年に会社を創業した。

「志成データム」という社名の由来は、創業当時、今後の製造業による国際化が進み、中でも中華圏（台湾、香港、中国など）の比重が大きくなるだろうという考えから台湾の友人に「志成＝志が成る」と命名してもらい、事業分野としてデータ通信をやろうということで、「データム」を後ろに付けた。

「志が成る」という言葉通り、会社創立までの道のりには、まさに一直線に突き進む斎藤社長の姿があった。家電メーカーで大型テレビ、衛星放送受信機の開発の後、外資系中小企業で血圧計の開発に携わるが、会社の倒産により、路頭に迷う。しかし、斎藤社長は、大手電気メーカーに再就職する気もなく会社設立への道を選んだ。

同社の社員は現在10人中6人がエンジニアであり、全体の半数は女性だ。東京都町田市の本社はあくまでも開発をする場所であり、エンジニアたちは個人で設計開発に取り組むことが多く、電気回路の設計やソフトウェア開発を行う。

「設計業務をこなせるかどうかはより本人のやる気次第だ。学校で勉強してきたことも大事だが、現場経験をどんどん積んで欲しい。開発の仕事は、自ら学習しないと続かない仕事。社員から発案したアイデアはなるべく使いたい」と斎藤社長は開発者とのチームの方を語る。

### 電子黒板が繰り出す! わかる・できる学びの時間

斎藤社長の開発への思いは製品にも大きく表れている。取材で最初に目を引いたのが電子黒板であった。「パソコンのディスプレイを応用した電子黒板は、タッチパネルの操作で直接画面に文字を書くことができ、大型モニターとしても使用可能」という新鮮な光景に私たちは声をあげて驚いた。斎藤社長は私たちの反応に少し戸惑いながら「この電子黒板は10年前に完成していたんです」と製品の説明をてくれた。

電子黒板は新しい学習形態として学力向上への寄与が期待され、全国の小・中学校が導入を検討している。また、電子黒板専用の教材もあり、音声も出るので英語の授業ではネイティブの発音も確認できる。イメージを伝えてより理解を深めることができ、生徒を惹きこむプラス効果があると5年に実効性が評価された。

そんな電子黒板の次なる使い道は何か?「小学校の児童を狙った犯罪の防犯や災害時に備え、より早い伝達手段としての活用ができる」と斎藤社長は語る。

日常生活を送っている私たちの横で、斎藤社長は常に新しい発想で開発に向けたアンテナを張りめぐらせていくのだ。

### 「健やかな老い」を目指して～PASESA～

同社が医療・介護分野向けに開発しているのが、血行動態測定型血圧計「PASESA（パセーサ）」である。Prevent Arterio Sclerosis and Enjoy Successful Aging（動脈硬化を予防し、“健やかに老いる”を楽しむ）の頭文字を取り、「PASESA」となった。

文字通り、動脈硬化の予防につながる製品であり、ただの血圧計ではない。従来の血圧計の機能に加えて、血管の弾力性からなんと血管年齢を算出することができる。さらに魅力的なのは、計測の手軽さだ。従来の動脈硬化検査装置は、測定に時間がかかり、ベッドに横になる必要があった。しかし同製品は、片腕にカフを巻くだけ、操作はワンタッチ。測定時間は約2分、さらに詳細データの印刷まで完了してしまうというから驚きである。動脈硬化などの生活習慣病は、私たちの健康を脅かすものであり、誰もがかり得る。自らの血管状態を知って早くから生活習慣病の予防に取り組むことは、「健やかな老い」を楽しむ第一歩となるのである。

同製品は07年に開発し、現在、厚生労働省の薬事申請中である。許認可が下りれば、各病院や人間ドックで力を発揮すると同時に、病院に足を運ぶことなく、自宅における「セルフメディケーション（自己健康管理）」の促進にもつながるであろう。

「自分が開発した血圧計が普及し、病気の人が減少してほしい」と語る斎藤社長はまさに、老いをも楽しみに変えてしまう健康的な開発者でもあった。

### コトづくりという発想の原点

創業からずっと変わらない思い。それは「コトづくり」に対するこだわりであった。「コトづくり」とは、「モノに付帯する機能や効能などを重視すること」（斎藤社長）であり、モノという概念に捉われないということである。この「コトづくり」への思いは、電子黒板やPASESAにも反映されている。

「文字を書くモノ」ではなく、「楽しく学習するコト」。「血圧を測るモノ」ではなく、「未然に病気を防ぎ、健康になるコト」。どちらも、使用者と等身大に向かい合った画期的な製品である。「すでに普及しているモノを改善するのではなく、その先で新しいモノを生み出すことこそ自分たちの仕事」と語る斎藤社長の姿から



は、技術者として未来を自らの手で輝かせる、力強い眼差しが感じられた。

電子黒板、PASESAは、政権交代後の仕分けや薬事審査の許認可待ちなど、社会的な障害・課題が存在し、普及への道はなかなか険しい。しかし斎藤社長はそこで諦めない。常に新しい発想で製品をつくる斎藤社長はいま、エネルギーに関する分野にも興味を持ち、未来へのコトづくりに励んでいる。お風呂での消費エネルギーの半減や、豪雪地域で雪下ろしした雪の冷熱エネルギーを夏の冷房に応用することなど、日常生活からコトづくりの発想を生み出している。

「中小企業は一歩出ると外。その分ダイナミックな仕事ができる」。そう語る斎藤社長からは、技術者としての誇り、モノづくりへの強い眼差しが感じられた。

発想の可能性を制限せず、コトづくりへと直線に突き進む志成データム。そこにはまさに、「人が幸せになるコト」へ等身大の姿勢で向き合う、斎藤社長の強い思いがあった。

### 株式会社志成データム

所在地 東京都町田市小山ヶ丘2-2-5  
まちだテクノパーク内センタービル4F  
代表者 代表取締役 斎藤之良  
資本金 1億円 創業 昭和63年  
従業員数 10名  
事業内容 電子情報ボード、光学式タッチパネル  
動脈硬化検査装置、特定小電力データ通信機器  
ソフトウェア開発  
電話（代表） 042-798-4711  
ホームページ <http://www.shisei-d.co.jp/>

担当 熊谷 愛里 佐藤 麻佳